九州産業大学国際文化学部紀要　第28号　1－24（2004）

「けしき」をめぐって
――「けしき」の研究史と問題のありか――

辛　島　美　絵

はじめに

本研究は,「人間-環境系の媒体としての景観プロセスに関する学際的研究」*1の一環として，中世以前の日本語における景観に関する言葉の研究を行い，それを通して，日本文化における「景観」をめぐる意識にアプローチを試みようとするものである。

「景観」という語の発生は新しく，近代の植物学・地理学等の学術上の翻訳用語として誕生したものといわれている*2。

しかしながら,「景観」に内包される概念*3，あるいは類似の意味内容を持った用語は，近代の翻訳用語を待つまでもなく，日本の文献にも古来から存在している*4。

本研究では，我国における景観に対する人々の意識や，その変遷を解明するための一手段として，古来より用いられてきた景観に関わる語彙について，国語学的に考察を行う。

今日まで，景観に関わる諸語を一つの語彙として取り上げ，その語彙を総体的に考察した国語学的研究は存在しない。また，語彙といわず個別的な語においても＜語史の考察＞や＜語と語の意味の関係＞等が十分に検討されている語は少ない。

しかし，ひとつ「けしき」という語は,「けはい（気配）」や「気色（きしょく）」「景気（けいき）」等の諸語との意味関係や歴史的変遷，中国語との関係等々について興味深い事柄を含むために，研究者に注目され，論文に取り上げられる機会が多かった。また,「けしき」は＜古来から種々の日本語文献の中で使用され，今日でも日常的に多用される＞という点で，日本語の景観に関わる語彙における代表的な見出し語と目される。

よって，日本語の景観に関わる語彙研究の手始めとして，まずは「けしき」という語を取り上げることとし，日本語「けしき」についての現在までの研究を本稿に整理し，この用語をめぐる問題点を明確にする。

本論 「けしき」の研究史と問題のありか

(1) 中国語と「けしき」の関係について

(1-1) 「けしき」の出自

「けしき」は中国語「気色」が外来語として受容され，国語に定着したものといわれている。近代の学術論文では中井（1947）に(ア)の如き言及があるが，これが漢語だという意識はかなり以前からあったようで，根来（1976）が取り上げている(イ)『増補俚言集覧』の記事や，(ウ)本居宣長の言及によって知ることがてきる。さらに遡って鎌倉時代についても，佐藤喜代治（1996）に(エ)のような言及がある。

(ア)「気」なる言葉が，日本独特の用法をもつて，日本語として意味をもつて来るのは「物語」ものにあらわれる「けしき」「気色」という言葉からである。古事記万葉集でも「けしき」という言葉はある。それは「異しき」という意味をもつているのであつて，これとは別のものである。むしろそれは漢字の「気色」即人の態度，顔色，それより来る自然の描写等を意味する言葉の日本語化と考えるべきである。(19頁)

(イ)ただ『増補俚言集覧』上を開くと「けしき」の個所に…（中略）…の三例を掲げ，その増補の項に，

景色，気色，これは音語なれば古歌には見えず後にはよむこととなりたれどもそれさへ俊成卿などもこのむまじきよしいはれたり今はなべていふ詞とはなりたり*5

とあるのが注意される。この説くところにしたがうならば「けしき」は漢語であり…（138頁）

(ウ)これについては近年発見され公刊された本居宣長の『本居宣長随筆第十四巻石上永言随筆』のなかで，これは詠歌に関しての雑考を十三項目にわたって記した考説であるが，宣長が次のように説くのが見逃せない。

○けしきてふ詞，近代さたあり，是は字音なる故にきらはるる歟，字音の語は，もとより読まじき事なれ共，字音のやうにも聞えず，やはらかなる詞は，期(ゴ)，縁(エニ)，役(ヤク)，菊(キク)なども，つねによむ例有り，けしきも読なれて，音のやうにも聞えねば，去るべきにあらず，但し歌のさまによるべし，中比の歌に，けしきとはいふまじき所にも，多くいへる有り，其さまによるべき事也。*6

宣長はここで「けしき」は漢語起源の語であってもすっかり和語化している。だから「期」「縁」「役」「菊」といった語を和歌に詠むように「けしき」も和歌に詠んでいっこうさしつかえない。それはその和歌のさま，風体，姿によるの

だと説くのである。(145頁)

(エ)『宗尊親王三百首』に

雲までもあはれにたへぬけしきかな秋のゆふべのむらさめの空

という歌があります。「むらさめ」は「群雨」の意で，にわかに降る雨。秋の夕方ににわか雨の降るけしきは趣の深いものであるが，このけしきでは雲までが感動に堪えない風情だというのです。この歌について，民部卿藤原為家(1198～1275)が批判したことばに，

気色といふ詞好んで詠むべからざる由，亡父申し候ひき。*7

とあります。亡父は藤原定家。和歌では，努めて和語を用い，漢語を避けたので，「気色」という漢語を好んで用いるのはよくないと言ったものと思われます。(87頁)

古来の辞書における記述でも，黒川本のみの掲載ではあるが『色葉字類抄』(中99オ)*8の畳字部に，

氣色 人躰部 ケシキ

とあるのをはじめ，近代では，『言海』*9に，

けしき（名）気色（一）ケハヒ。アリサマ。ミエ。ヤウス。キザシ。…
（二）顔ノケハヒ。カホイロ。…

と記されている。『言海』の「索引指南」の「種種ノ標」によると，「気色」に付された印は「和漢通用字」の印とあるので，『言海』においても同様の認識が示されていると見てよかろう。

(1-2) 中国語「気色」の意味と受容について

『大漢和辞典』(修訂版)の「気色（キシヨク・ケシキ）」の項*10には，

①こころばせの面色に表れたもの。心のけはひ。態度顔面。

②ありさま。やうす。

とあり，①には『漢書・翼奉伝』の「故臧病則気色発於面」の例（縮写版では『荀子・勧学篇』の「不観気色而言謂之瞽」の例*11)，②には『六韜』の「城之気色如死灰」や謝恵連の「西陵遇風献康楽詩」中の「肅條州渚際，気色少諧和」の例が挙げられる。また，『漢語大詞典』の「気色」の項*12でも，

①指人的面色，神态。

②景色；景象。

として，①には『大漢和辞典』に挙げられた『荀子』以下の例，②には，同じく『六韜』や「西陵遇風献康楽詩」以下の例が挙げられている*13。

このような意味を持つ中国語「気色」の受容に関して，西端(1978)は(オ)の如く述

べて，<中国語の持っていた「気色」の二種類の意味は，そのまま我国に受け継がれた>とする。

(オ)ところで，前項において述べたように，後拾遺集以後に用いられている「けしき」は二種の意味を表わす〔筆者注：「自然の様子，風景という意味で代表される自然を表わす『けしき』」と「人間の様子や態度を表わす『けしき』」(92頁)〕ということであったが，こうした傾向は，彼の地の漢詩文中においても早くからあったようである。私見の限りでは，自然に関する例の最も早いものは，前掲の(5)〔筆者注：上掲『六韜』の例〕であり，人間に関する例では，左記の荀子の例〔筆者注：上掲『荀子』の例〕が最も早い。(93頁)

ただし，佐藤喜代治（1996）は，『六韜』の例について，『抱朴子』外篇の例と併せて「形勢」の意味で使用されていることを指摘しているし，上の『大漢和辞典』等の意味記述とも併せて考えると，『六韜』の例をいわゆる風景を表した古例として扱うべきではなかろう。「自然に関する」とはいってもかなり広義である。

一方，深雪（1953）は，気色の原義と日本での受容について，(カ)の如く述べて西端（1978）とは異なる見解を示す。

(カ)気色という文字は，今から二十四世紀ばかり前の春秋戦国時代，今の北中国にあつた趙という国の荀況の書いた，荀子という本に

不観気色而言謂之瞽…

とあり，顔色や態度をあらわすのに使われています。思うに，気色という文字は古くから日本で，けしきと，呉音読されていたらしい。

日本で気色という文字，しかしその多くは平仮名ではあるけれども盛んに使われているのは平安朝時代で，その意味は前に例にあげた古い中国の気色に通ずるものでした。けれども，面白いことに，その頃の中国では，気色のあらわすものが，空気だとか，天候だとかいうように，人から人の環境へ霊的なものからより気象学的な気体へと移行していた様です。ですから平安朝の日本の気色と，平安朝時代の中国の気色のいみとは異つていたのです。この相異を生じた原因として，昔中国から日本に入つて来た気色が，日本という国が島国であつたために，中国の思想の変化の影響を直接に受けなかつたこと。当時すでに，気色の意味と発音が，日本において国語化していたこと，昔の日本の人達が当時の隋唐の書物よりも中国の古典を非常に学んだために古典に出て来る気色の意味が守られていたこと，中国の古い呉音に対して隋唐に至り北方中国の漢音が勢力を張つたために，気色の意味はますます北方的なものが出来上つたこと。等があげられるのではないかと思います。(4頁)

つまり西端（1978）が＜もともと中国にあった「気色」の自然に関する意味と人間に関する意味の二種がそのまま日本に入ってきた＞と見るのに対し，深雪(1953)では＜中国では「気色」は人の顔色や態度を表す語であり，これはそのまま日本に入ったが，後に中国で発生した自然に関する意味は平安時代には入らなかった（日本語で「けしき」が風景を表すようなったのは徳川時代ごろである)＞とするのである。

両者の相違は，自然について使用する「けしき」の意味の捉え方の違いより生じている。西端（1978）のいう(オ)「自然の様子，風景という意味」の「けしき」の例を，深雪（1953）がどう見たかは――徳川時代頃に日本語「けしき」が風景を表すようなった〔後の(4)(ヤ)参照〕とする具体的根拠が示されてないため――不明であるが，西端（1978）における「自然に関する例」とはかなり広義であり，いわゆる「風景」とすべきではない用例も多く，なお検討を要する。

中国語「気色」の受容の問題を解明するには，漢籍における使用例の調査とともに，我国の文献資料各々の性質を鑑みた「気色」の用法の分析が必須である。上代の日本語文献の量的・質的制約もあって解明は容易ではないが，今後は自然の様子について使用する「けしき」の意味を厳密に検証しつつ，その変遷を明らかにすることが必要であろう。「けしき」と「風景」の意味の相違，そして「けしき」が「風景」的な意味を表すようになる時期は，(4)で述べる「景色」という表記とも深く関わっている。

なお，「けしき」の和語化の時期については，西端（1978）では，伝統的な和歌（「応和三（963）年七月中旬宰相中将伊尹君達春秋歌合」等）中に使用例があることや，『伊勢物語』や「天徳四（960）年三月卅日内裏歌合」の判詞にみえる「御」を冠した「御気色」の存在等を和語化の兆しとし，「けしきだつ」「けしきづく」「けしきどる」「けしきばむ」などの和漢複合語の発生や平安中期以降の和歌や仮名散文における多用などをもって和語化の完了と認めている。

(2) 「けしき」の意味・用法について

(2-1) 「けしき」と主観性

中井（1947）は，日本語における「気（け，き)」の変遷の解明を目的とするものだが，同時に「けしき」の意味の総括的理解を試みた最初の論でもある。平安時代の「けしき」は人間の表情，顔貌，動作，さらに様子，自然現象へと意味拡大を起したと説き，当時の「けしき」の特質を＜人間・自然の全体にあるところの支配しがたき秩序の表現＞とする。この考えは『源氏物語』等において「けしき」が＜人の心理の内面＞と＜自然現象＞の表現の両方に使用されることに注目して導かれたもので，これを(キ)の如く説明している。

(キ)この時代の人々は，未だ自然に対立する観察者としての自我を自ら意識せずして，自然と共に，物のあわれとでも云うべき，悠久なる寂寥の存在感の中に，共に入って行くかの様である。存在していることへの哀感に似た驚き，そこでは自我も未だ物なのであり，物のあわれは観察することより生まれるのではなくして，「今」，「此處に」，共存することの現実感の中に漲るのであろう。(21頁)

中井（1947）では，用語としての具体的な使用法については触れられていないため，どのように，そして誰の心理の内面を表現した言葉か――表現者の心理を表現した言葉なのか，第三者等の心理を表現した言葉なのか，それを感受するのは表現者か第三者か等――が明確ではない。伝達と表現が第一義であるところの言語にあっては，この問題は重要である。この点，山田（1960）が『今昔物語集』の注釈を通して指摘した(ク)は，「けしき」の意味の根幹を「その人の気分」「その人の気持ち」とした上で，さらに＜主観的な様子を表すこと＞を指摘して，他人の＜心理的なもの＞を観察し，感受する表現主体の＜主観＞の存在を明確にしている。

(ク)その意は，もと，顔色に現れたその人の気分ということであろうが，転じて，顔色のみならず，挙措進退すべてにうかがわれるその人の気持ち，やがて，一般的な意味の，けわい・たたずまいまで拡げられたものもまま見えるようである。即ち，通じては，様子と訳することもできようが，個人の様子を指す場合とその場面の雰囲気・情景を指す場合とに自ら分かれるものと考えられる。「様（さま）」「有様（ありさま）」は，この「気色」の同義語と考えられるが，「様」には「気色」に見られるような主観的な様子とは異なり，客観的な様子もしくは情勢という用法が本体であるらしく思われ，「有様」は，其の場の現在の情勢，もしくは，今まで経過した事情・経緯の意に使われている模様である。(371頁)

同様に，佐藤亨（1980）も奈良・平安時代の「景気」とその類義語の用例を検討した中で，「風景」「景」「景物」と比較し(ケ)の如く「気色」「景気」の＜主観がとらえた＞という点を強調している。

(ケ)ただここで注意したいことは，「景気」は「気色」と同様，主観がとらえた様子や有様をいう点で一致し，客観的存在たるものの様子や有様を指す「風景」「景」「景物」などとニュアンスを異にすると言うことである。(227頁)

(2-2) 「けしき」と視覚性

では，どのように主観で捉えるかというと，その方法は「けしき」においては＜視覚的である＞ことが，特に「けはひ」との対比から明らかにされている。たとえば，吉沢（1973）が『源氏物語』の例から両者の相違について述べた(コ)，池田（1957）が

『紫式部日記』の「けはひ」の注で述べた(サ)，山田（1963）が『今昔物語集』の「けはひ」について述べた(シ)，根来（1976）が『源氏物語』や『枕草子』等の検討を通して指摘した(ス)など。

(コ)「けはひ」は心を包む雰囲気，「けしき」は眼にうつる風姿，「けはひ」は「感じ」，「けしき」は「さま」，人に即して云へば，「けはひ」は「そぶり」，「けしき」は顔付，と一応は考へられる。(127頁)

(サ)○けはひ—やうす。これに似たる語に「けしき」といふがあり。「けしき」は客体たる対象のもつ性格が，明らかに外部に表出し，之を視覚によりて捉へ得るが如き場合に用ゐらる。例へば「…（略）」等これなり。「けはひ」は対象のもつ性格が，外部に表出せず，しかも直感によりてそれとなく感得し得るが如き場合に用ゐらる。例へば「…（略）」等これなり。傍注には「景気」の字をあて，釈には「気なり。はひは，くさはひ，にぎはひなどの，はひと同じ心ばへの語なり。さればけは気なれども，気はひといへば，たゞに気といふとは，すこし心ばへ異なり」と云へり。「けしき」に比して「けはひ」は観念的なるを知るべし。なほ校勘の條を見よ。(66頁)

(シ)最も多い用法は，耳で聴いて知られる，人の存否，様子であり「気色」が，目で視て知られる，人の表情を主とするのと大いに径庭がある。(450頁)

(ス)この例によって光源氏なら光源氏その人のなかからおのずと発するものが「け」であることがよくわかろう。ところで，「け」は他と交渉を持ちたがり他なるものもそれを助けてやがてそれがそとに現れるのが「けしき」であると思う。…（中略）…さきに見たように「け」はその人そのものから発するのであったが，このように見てくるとそれが外に現れるのを他者が見たり感じたりするのが「けしき」であるとわかろう。そういえば「けしき」は「けはひ」とちがい，「けはひ」が「聞く」「聞ゆ」というのに対して，「けしき」は「見る」「見ゆ」「見す」といい，また「けはひ」が「す」というのに対して，「けしき」は「あり」というのであった。…（中略）…しいていえば「けはひ」が聴覚，触覚，嗅覚などによって感じられる様子をいうのに対して，「けしき」は視覚によってとらえる様子をいうのであるから，その顔形姿を実際に眼前に見て，直接にそれから見てとれる様子であることであろう。(140～143頁)

(2-3) 「けしき」と抽象性・限定性

「けはひ」との対比といえば，渡辺（1982）が「けしき」と「けはひ」を共に「『けはひ』語彙」と認定し，その上で両者の差異を指摘したのは，「けしき」の意味の本質に触れて重要である。渡辺（1982）は，『伊勢物語』『紫式部日記』『大鏡』といった中

古の代表的文学作品の検証を通じ，「『けはひ』語彙」について(セ)の如く説明している。

(セ)「けはひ」は，具体的な動作や心情を示さず，動作の姿を抽象した概念である。要するに抽象名詞のことなのだが，典型的な抽象名詞の「こと」「もの」「さま」などに比べると，抽象度において劣り，その分だけ具体性に高い。身のこなし，振舞い，たたずまい，などの様相を含意しながら，その具体相を捨象した，とでも言う段階のものであろう。現代語に同レベルのものを求めるなら，いま挙げた「身のこなし，振舞い，たたずまい」などの他に，

挙動・態度・様子

などの漢語を追加することが出来るだろう。そしてこのような，「こと」「さま」などの純抽象水準からの第一次具体化，とも言えそうなレベルの中で，

動作・作用・動き

のような，「こと」の外面の第一次具体化でもなく，

気分・感情・思い

のような，心の「さま」の第一次具体化でもなく，

態度・様子・振舞い

のような，内面のあらわれとしての外面，中身を反映した外側，の第一次具体化であるところに「けはひ」語彙の特徴がある。

抽象 ┬ 外面の第一次具体化 ── A
　　 ├ 内面の反映としての外面の第一次具体化 ── B
　　 └ 内面の第一次具体化 ── C

のように語彙をわけた場合の，Bの位置に属するもの，それを「けはひ」語彙の特徴と定めることにしたい。(296～297頁)

つまり，「けはひ」語彙に属する語とは＜内面のあらわれとしての外面を第一次具体化した抽象名詞＞である。そのうえで渡辺（1982）は「けしき」と「けはひ」の相違を(ソ)の如く説明する。

(ソ)この問い〔筆者注：なぜ伊勢物語の「けはひ」語彙が「けしき」一語で占められるか〕への答えの手がかりは，伊勢物語の使用する「けしき」の，「けはひ」語彙の中での特性から得られるように思われる。と言うのは，「けしき」は，

おほやけの御けしきあしかりけり。

のように，この時この場での人物の内面が，外面に反映した所を押える語のように思われる。それに対して「けはひ」は，

大納言の君の，夜夜は御前にいと近うふし給ひつつ，物語し給ひしけはひの恋しきも，なほ世にしたがひぬる心か。(紫式部日記)

で，「夜夜」や「つつ」と共に現れることが示すように，その時あの時に繰り返し認められるものをも押え得る語と言えよう。もとより「けはひ」が

世の物語，しめじめとしておはするけはひ

のように，この時この場の外面を押さえるのに使われることは稀でない。だがこのような場合でも「けはひ」は，それを手がかりにこの時この場での内面を推すためによりは，日ごろからの本質的な内面をつかむために，用いられるものの如くである。その証拠にこの文章は，

…けはひ，をさなしと人のあなづりきこゆるこそあしけれと…

のような表現に流れ込んでゆく。たまたまこの時この場の外面において捉えられてはいるけれども，紫式部がそこに見出そうとしているものは，この時この場に限らない，常日頃にも現れるものなのである。

ということを「けしき」に裏返して言えば，「けしき」は「けはひ」語彙に属するとは言え，その中では外面への傾斜が濃厚だ，ということである。(298～299頁)

「けしき」を抽象名詞の「けはひ」語彙とする渡辺（1982）の考え方は，この語の古代語から現代語への変遷を考える上で重要な手掛かりを提供する。我々は＜現代語の「景色」はこのような抽象性をどれほど継承しえたか＞について考えねばならないし，＜抽象性が希薄になる過程ときっかけ＞についても追求しなければならないからである。また，「けしき」に「この時この場」という限定性を認め，外面への傾斜を濃厚と捉える見方も，後に述べる平安後期以降に増える自然に関して使用する場合の「けしき」の意味を検証する上で，非常に重要である*14。

(2-4) 「けしき」の和歌における用法

「けしき」は，(1-1)の(イ)(ウ)(エ)にあるように，和歌での使用に特色が見られ，技法や作者の作歌姿勢などの面からも考究されている。歌論の「景気」という理念を考究した中島（1964）は，「けしき」が――「景気」がそうであるのとは違って――歌論上の用語には成り得ていないことを(タ)の如く述べている。

(タ)此の景気の語に極めて類似したものに景色なる用語が存する。…（中略）…。景気は景色の語から出たものかとも考えられるが，何れにしても景色の用例は歌合判詞に於いても古くから認められる。…（中略）…，しかしこれらに於いては単なる景色，乃至は素材的な要素の多い用例であって，これらの「けしき」には尚歌論性を認める事は出来ない様に思われる。俊成に於いては…（中略）…，単に素材的な景色ではなく一首全体に乃至は数句によって表現された，形象化された世界に於いて用いられているのであって，それは心や詞，姿と共に

歌論上の用語となって居ることは一応認められよう。しかし景気とは異って，…の例の如く恋の上にも用いられ，これらでは源氏物語等にも多く見られた気配・様子の如き性格を持っているのに対して，広田社歌合以後ではいずれも叙景であり，視覚的映像性の相当明確に浮かび上がる用例が多く，寧ろ「けしき」としては此の辺にその独自性が有る様に思われ，なお雑駁なものが存する。…（中略）…。然も又「けしき」は常に「…のけしき」とか「…といへるけしき」の如く用いられ「けしき」が独自で用いられていない点でも，「けしき」は歌論性を十分に持っているとは言い難い。(35～36頁)

加えて，(タ)で注目されるのは，「『けしき』は常に『…のけしき』とか『…といへるけしき』の如く用いられ『けしき』が独自で用いられていない」という用法上の指摘である。和歌におけるこのような類型的表現形式は根来（1976）や西端（1978）でも言及されているが，＜なぜこのような用法上の偏りが見られるのか＞＜和歌だけに見られるのか＞＜そうなら何故か＞等々についての検討はまだなされていない。これを(2-3)で指摘されている抽象性と併せ考えてみることは，中世以前の「けしき」の意味を考える上で非常に重要であると思う。

また，特に自然を表す和歌の「けしき」の用法に注目したのは，根来（1976），西端（1978）である。両者は，自然を表す「けしき」は和文の散文では平安中期の『宇津保物語』『蜻蛉日記』以後，和歌（八代集）では『後拾遺和歌集』〔選歌範囲は天暦末（957）年から応徳三（1086）年〕以後に一般的に用いられると指摘し，その理由を作家の姿勢や，和歌の歌風との関連から説明する。たとえば，根来（1976）は(チ)，西端（1978）も仮名散文について(ツ)，和歌について(テ)(ト)のごとく述べる。

(チ)このように随筆，物語，日記において「けしき」が人間の様子から自然の風景へと移りゆくのは，作家が自然を自然としてながめるようになったせいであることは追い追い述べることにし，…（中略）…。こういう歌を見てわたくしは和歌に「けしき」が現れるようになるのは平安中期以後和歌の詠み手の自然への対し方が変わり，詠み手がとりわけ美しい景色を景色としてながめるようになったけざやかな現れであろうと考える。(144～145頁)

(ツ)ところで，いま，平安朝の仮名散文作品における自然描写について考えた場合，これら宇津保物語や蜻蛉日記が，その転換期に位置するように思われる。その証左の一つとして，それまで仮名散文作品を通覧するに，その自然描写は，皆無か，描写していたとしても無味乾燥な描写に留っているのに対して，宇津保物語や蜻蛉日記あたりから，微細な点まで情趣あふれる描写を行なうようになったという点があげられよう。また，用語の面でも，これら二作品は，それま

での仮名散文作品とは異質なものを含んでいる。宇津保物語については，まだ十分に考究されていない部分もあるが，蜻蛉日記については，当時の他の作品に比べ，特筆すべきところがある。…（中略）…。その点，神尾暢子氏の論を参照するなら，蜻蛉日記は，語性転換の契機となった作品であり，それを定着させたのが源氏物語であるといえよう。つまり，「けしき」に関していえば，蜻蛉日記には，それまで人間に関する意味で用いられていた「けしき」を，自然に関する意味ででも用いるようになる要因が十分に備わっていたといえる。

そして，以後，枕草子，源氏物語，紫式部日記，和泉式部日記，更級日記と，量の多少はあるが，すべての作品において，人間に関する「けしき」とともに，自然に関する「けしき」も用いられている。その点で，前掲の神尾氏の論を敷衍するなら，「けしき」については，宇津保物語や蜻蛉日記が語性転換の契機となった作品であり，それを定着させたのが枕草子，源氏物語，紫式部日記，和泉式部日記であるといえる。(95～96頁)

(テ)和文中に自然に関する「けしき」を用い始めた時期から定着した時期までの期間をすべて後拾遺集の選歌範囲が包含しているところに，勅撰集においては，後拾遺集以後にしか「けしき」が用いられないことの要因のひとつがあるのではないだろうか。(101頁)

(ト)このように，各先学ともに，後拾遺集の歌風については，三代集とは一線を画し，拾遺集までの抒情歌が減少し，それにかわって，叙景歌が増加しているという叙景性を指摘されている。この叙景歌とは，抒情歌が自然を詠むにも自然を人間と融合させて表現しているのに対して，自然を自然そのものとして，客観的にとらえて表現しているものである。この点，前項までに述べてきた外在的要因〔筆者注：(テ)参照〕や，和文中，特に和歌中に多く用いられている自然に関する「けしき」が「空のけしき」「春のけしき」という例の示すように，自然の様子や風景を客観的にとらえ包括的に表現する語である点等と考え合わせると，三代集には用いられることのなかった「けしき」が後拾遺集から用いられるようになったことが首肯されよう。(102～103頁)

すなわち，『蜻蛉日記』や『宇津保物語』等の作者の描写姿勢や『後拾遺集』の歌風が「けしき」を従来の人間に関する意味での使用のみならず，自然に関する意味でも用いることを一般的にしたという説明である。ともに平安中期の資料における使用状況の偏りを指摘して，仮名散文や和歌の作家と「けしき」という用語との関わりを追求する興味深い論である。ただし，両者は，仮名散文や和歌表現において作者が「けしき」をどう用いたかを問題にするもので，文学作品を離れた日本語としての「けしき」

の意味や意味変化について考究する論ではない。

とすると，今後は，如上の文学作品における特色を踏まえた上で，その限定をはずした「けしき」の使用状況，つまり作者やその受容者達の文献を離れた日常の言語における使用状況を推定することが課題となろう。『宇津保物語』『蜻蛉日記』成立以前には，人々——文学の作者やその受容者達，さらに望むなら貴族層・庶民層，男性・女性等——の日常では自然の様子を表す時にはどのような表現を用いていたか，である。彼らは日常で自然の様子をいうときに「けしき」という語は使わなかったのか，使わなかったのなら別の用語を用いたのか，あるいは，日常生活においても自然を表す「けしき」の概念の伝達・表現が不要であったのか等々である。これも文献資料の質的・量的不足により，どこまで追求可能かわからないが，＜日本文化における「景観」をめぐる意識にアプローチを試みる＞という本研究の目的からしても，(1-2)で触れた平安時代の自然の様子を表す「けしき」と後世の「景色」の意味の相違とあわせて，ぜひ明確にしたいところである。

ところで，西端は(ト)で自然に関する「けしき」について「自然の様子や風景を客観的にとらえ包括的に表現する語である」の如く「包括的に表現する」という表現を用いているが，これは根来（1976）(ナ)が「総合的包括的」というのとほぼ同じ概念であろうか。

(ナ) その「けしき」〔筆者注：和歌における「けしき」〕は単なる自然をさすのではなく美醜の判断において自然を見ているので美しい景色といったのであるが，ここで気づかされるもう一つのことはそれが今日わたくしたちがいう「けしき」のように個別的限定的な景色でなく総合的包括的な景色をさすことである。実際，八代集の「けしき」を調べていくと多いほうから「秋のけしき」七例，「空のけしき」七例，「野辺のけしき」六例，「夜半のけしき」五例，「春のけしき」四例の順になるが，このように「けしき」は総合的包括的なものをさすだけに表現に詩的な情趣を与えることになり，そこに静かな落ち着きが認められるのであった。(145～146頁)

根来（1976）は当時の和歌において「けしき」が「総合的包括的な景色」をさして用いられることは，現代語の「けしき」とは異なる特色だと捉えている。この相違の指摘は重要であるはずだが，「総合的包括的な景色」の意味するところが曖昧である。思うに，「今日の関門海峡の景色」や「車窓からの景色」等の現代の表現（根来のいう「個別的限定的な景色」に該当するか）のように地理的なある特定の場所・範囲を限った風景のことをいうのではなく，「秋」や「空」のごとく，かなり広い空間や時期を捉える表現について「包括的」と言ったものであろうか。しかし，たとえば，「野辺のけし

き」（千載集　秋歌上）「駒のけしき」（詞花集巻第一・春・一二）「たづ（鶴）のけしき」（千載集巻第十・賀歌・六三〇）等の「けしき」は，むしろ「個別的限定的」にも感じられ，理解しにくい。今少し厳密な用語規定が欲せられるところである。

(2-5)　中世以前の「けしき」の意味

「けしき（気色）」の根本的な語義を『日本国語大辞典』*15では，

①物の外面の様子，有様。また，外見から受ける感じ。

②外から観察することのできる，心の内面の様子，有様。（４巻1329頁）

と記述している。これは中世以前の「けしき」についての上掲の考察の流れにそう記述であり，現時点での「けしき」の意味の共通理解とすることができよう。

このような「けしき」の根本的な語義はさらに下位分類が可能であるが，その派生的意味の認定にはなお検討すべき点が多い。そこでは＜新たな意味の発生＞と＜特定の文脈における「けしき」の多用＞とが明確に区別される必要があろう。平安時代の「けしき」は(2-3)の渡辺（1982）の指摘にあるように，抽象名詞的性格をもつため，文脈により様々な内容を表すからである。

梶井（1990）は平安時代の「けしき」の意味を16項に分けるが，たとえば㈡「自然界の様子」，㈬「心を煩わす気持ち，心配」などを「けしき」の「意味」とするかどうかは慎重な検討を要する。㈡の「けしき」は，本当に「けしき」自体が「自然界の様子」の意味を表しているのか。風・雲の「様子」ではないのか。㈬も場面・文脈により「けしき」が「心配」の情と通じて解釈されるだけではないのか。この段階では＜自分がする心配＞については使用されないと思うが，本当に「けしき」が「心配」の意味を持つと認めてよいのか。

㈡③自然の様子

かぢとり「けふかぜくものけしきはなはだあし」といひて

（『土佐日記』　二月四日）

これまでの「けしき」は人に関連のある意味で使われていたが，この例では，初めて自然界の様子の意味で使われている。(14頁)

㈬⑥心を煩わす気持ち，心配

「いかやうに思してにかあらんぞ，御気色（みけしき）ありつるを，いかゞさは聞えむ」とありつれば

（〔筆者注：『かげろふ日記』〕中　天禄二年六月）

特定の無意識な感情〈心配〉の意味である。本来なら「ご心配な御気色」とでも表現すべきものの修飾語を省き，文脈から察知させるのである。このように特定化することによって「気色」の多義化が起こった最初の例である。(15頁)

「意味」をどう定義するかという根本的な問題も介在し，このような疑問は梶井(1990)の主張とは次元を異にするものかもしれないが，本研究にあってはここを正確に押さえておかなければ，(1-2)で言及したような，自然について使用する「けしき」の意味の捉え方の相違の問題も解決しがたい。

今後は(2)で述べてきた諸々の点をあわせ，平安・鎌倉時代における「けしき」の用法の把握と，研究目的に即した正確な意味把握を行い，未だ殆ど研究のない室町時代以降における「けしき」の検討，さらに国広（1982）で指摘されている(ネ)の如き現代語「けしき」の特色との比較へと繋いでいく必要があろう。

(ネ)ケシキは…（中略）…ナガメと違って〈動作主体の視点と関係なく，対象そのものを客観的にとらえる〉語であるためだと説明することができる。…(中略)…。フウケイの方はいわば額縁にはいったような〈まとまり〉があるとらえかたをするのに対して，ケシキの方には特にそういう〈まとまり〉が含まれていないということである。…（中略）…。文体的にいうとケシキは日常語に属し，フウケイはやや文語的である。(253～255頁)

(3) 「きしょく（きそく）」との関係について

「気色」は漢音読みでは「きしょく」となる。『日本国語大辞典』の「けしき（気色）」の項の補注に，

中古以前の漢文体の資料はどう読んでいたか明らかではないが「続日本紀」の例は参考のため，「きしょく」の項と重複してあげた。→きしょく。(4巻1329頁)。

とあるように，漢文系資料の（さらには和文系でも漢字表記された）「気色」がどのように読まれていたのか判然とせず，当時の「きしょく」「けしき」の意義・用法の差の有無についても詳細は不明である。しかし，山田（1960）(ノ)の「もとは同意であっても」という文言の如く，同じ漢語であるところから，最初は同じ意味であったと見るのが一般的であろう。

(ノ)気色は，字類抄，ケの畳字にケシキ，キの畳字にキソクと見え，共に「人体部」と注する（この二語は，もと同意であっても，前者は和語的，後者は漢語的という様相のちがいが存したものと思う)。(371頁)

山田（1960）は，両者に和語的・漢語的という様相のちがいがあったかと推察しているが，これは呉音読みが早く日本語に定着したこと，和文資料の仮名書き例は「けしき」がほとんどであること*16に拠るものと思われる。三谷（1965）が，『狭衣物語』の道成の発話(ハ)の「御気色」の頭注で，(ヒ)のごとく「『懈怠』『高名』と共に男言葉」と述べているのも，山田（1960）の「漢語的」という指摘と通じる。

(ハ)「中納言殿の人々は，帰り参りね。大貳殿は，今は鳥飼などにやおはしぬらんな。中納言殿の御物忌，いときびしかりつれば，とみにも，え出でで，かく懈怠しつるなり。御気色よろしからねば，『とみにも，暇申出づまじきなめり』と思ひつるに。高名の馬をさへ賜はせたる」など，言ひて，(102～103頁)

(ヒ)狭衣殿のご機嫌がよくないから，私は急にも御暇を申し出してはいけなかったようだよと心配していたのに暇を頂いた。その上に餞別として有名な馬までも賜わった。「きそく（気色)」は「けしき」と同じだが，「懈怠」「高名」と共に男言葉。(102～103頁)

この「けしき」と「きしょく」は，中世以後その意味内容を分かち，現代では画然たる区別を持つことが田中（1969）(フ)に指摘され，『日本国語大辞典』の「けしき（気色)」の語誌の項にも，それを承けて(ヘ)の如く記述されている。すなわち，「きしょく（きそく)」は中世以降＜人間の気持ちや気分の意味を主に表すようになり，自然について用いられることはなくなる＞が，対して「けしき」は＜もっぱら自然界の様子を表すようになった＞というものである。

(フ)この「きそく」は狭衣に初登場して以降，

○大鏡・四「一条院の御なやみをもらせ給ふきはに，御前にまいり給て，御**きそく**たまはり給ければ」(大系191頁）…（以下用例略）…

など，気分・機嫌・内意・意向の意で用いられ，特に，「意向・意中・内意」の意を主とする心内の表情語として中世に行われるのである。一方また「きしょく」も本来の漢文から脱して「平治」「平家」以降は和文にも用いられ，以後謡曲・狂言・浄瑠璃・歌舞伎などに数多くあらわれるが，これまたその多くが心内の表情の義を表わしている。…（中略）…右の通り「きしょく」には外形の表情の義の用例もあるが，それらは皆，心の外に表われた表情としての＜顔色＞の意で，「けしき」(1)①に示したような＜自然景＞の意は中世以降見られない。中世以降，和文に多く使われ始めた「きしょく」は心内の表情を主たる義として広がって行ったことが明らかである。

かくして，平安時代，外形の表情・心内の表情の両義を表わして，広く用いられていた「けしき」が，平安中期を過ぎて次第に和文に登場して来た「きそく」「きしょく」に，後者すなわち心内の表情の語義の多くを次第に譲り渡して来た経過が知られ，中・近世の混用過渡期を経て，今日，「景色（**けしき**）がすばらしい」「気色（**きしょく**）が悪い」の固定した表現に見られるような画然とした区別を生んだものである。(12～13頁)

(ヘ)鎌倉時代以降，人の気分や気持を表わす意は漢音読みの「きそく」「きしょく」

に譲り，「けしき」は現在のようにもっぱら自然界の様子を表わすようになった。それによって表記も近世になって「景色」があてられるようになる。（4巻1329頁）

田中（1969）では「中・近世の混用過渡期」についての詳細な記述は略されているが，佐藤亨（1980）では＜室町時代の「けしき」と「きしょく」では後者がやや限定的な用法で用いられる以外，意味の差は認められない＞ことを㈱の如く述べて，室町期の両者の状態をより具体的に説明している。

㈱ところで「気色」であるが，和語的なキソクはみえず，ケシキの外キショク（天草版伊曽保物語）という語もみられる。この場合，ケシキと意味上の差異は認められない。ただし，キショクは人間の外見上の様子（たとえば怒った様など）に用いるという差はある。なお「日葡辞書」「落葉集」にはそれぞれケシキ・キショクがみえるが，古本「節用集」諸本はケシキのみである。キショクは俗語であったのであろうか。言うまでもなく，ケシキは「気色」の呉音よみであり，キショクは漢音のよみ方によったもので，よみ方の違いによる語形の相違である。…（中略）…。

室町時代における「景気」とその周辺の語について若干述べた。「景気」が一般に通用し，人間の有様・様子についても用いられたこと，「気色」はキショクという語もあらわれて，ケシキよりやや限定された意味に用いられたこと，「風景」などの語が多用されてきたことなどが指摘できる。（232頁）

「きしょく」と「けしき」の意義分化の過程を考える上での鍵となるのは＜「けしき」が人間について使用されなくなる時期＞ではなかろうか。田中（1969）の指摘のように＜「きしょく（きそく）」は中世以後，自然景の意味に用いない＞としても，それは佐藤亨（1980）のごとく＜「けしき」よりやや限定された意味で用いられる＞という段階にすぎない。しかし，この上に＜「けしき」が人間の様子について使用されない＞ことになれば，両者に画然とした意味の別を認め得るはずである。しかし，佐藤亨（1989）では㈮のごとく，江戸時代に至っても人間の様子についての「けしき」の使用が指摘されており，まさしく「過渡期」が続いていることがわかる。

㈮しかし「景気」は次第に本来の意味で用いられることが少なくなり，反対に物事の活況・商況の活潑を指す場合が多くなっていく。故に「景気」が本来担っていた自然や人間の様子を示すための別語が必要となる。ケシキ（気色・景色）の進出がそれである。たとえば，

孫之丞（まごぜう）に段々（だんくど）詢（くど）けは気色（けしき）かはり立腹（りつぷく）して（武道伝来記）

落葉（おちば）の霜（しも）をふみてきたりしに，爰（ここ）に気色（けしき）ははるなれや。（西鶴諸国はなし　二）

然ばかり驚く気色なく清澄們にうち向ひて（南総里見八犬伝）

などである。右のように表記に「気色」「景色」の二種があるが，「気色」は主に人間の様子に用い「景色」は自然のたたずまいをいうに用いるという違いがある。「書言字考節用集」に「景色 又作二気-色一」とあり，「雑事類編」に「風物。…（略）景色」とある。また「雅俗幼学新書」に「景色」とあり，「景色」が次第に「景気」の本義（自然の様子）を担う過程がうかがいうるのである。またキショクは

常々武勇にたくましき人之上左を聞給ふ時ハ。御気色よかりしかば（太閤記二）

ときもり森右衛門殿気色をかへ，弓矢こそ持身なれ，（役者目利講〈江戸版〉）

の他，西鶴（懐硯）近松（源三位頼政）などにあるが，いずれも気分・顔色という意に用いている。

また「景気」と関連する「風景」は，用例は省くが近世において「景色」と共に多用されている。かくして，近世における「景気」及びその周辺に存するこれらの語は，現代へ連続するわけである。ただし「景」は文語的な文に用いられ，キショクは方言として存在している。(236～237頁)

さらに，いま一つ，両者の意義分化を考えるための鍵を探すならば，それは「けしき」が古来持っていた＜主観がとらえた，外から観察することのできる，という要素を「きしょく」がどこまで継承したか＞ではなかろうか。＜主観がとらえた，外から観察することのできる＞というのは古来の「けしき」のもつ根幹的な要素である。それを「きしょく」が放棄する過程を明確にすれば「中・近世の過渡期」という長い期間における変化の様相をより具体的に捉え得るはずである。

すなわち，田中（1969）が「きしょく」についていう「『意向・意中・内意』の意を主とする心内の表情語」の一々について＜発話者が外から見た誰かの様子なのか＞あるいは＜発話者が自分自身の状態について使うことができる語なのか＞あるいは＜発話者の観察とは無関係に使用できる語なのか＞を明確に提示することが必要であろうし，『日本国語大辞典』の「きしょく（気色）」の語誌の項(ミ)においても，「きしょく」が「人の内面の状態そのもの」を多く表すようになった時期――すなわち，主観がとらえた，外から観察することのできる，という特色を放棄した時期――について明確にする必要があろう。

(ミ)(1)「気色」は，呉音「けしき」と，漢音「きしょく」及びその直音化の「きそく」の三とおりの読みがなされる。「きそく」は平安末期以降用いられ，さらにやや遅れて「きしょく」が中世以降盛んに使用されたが，「きしょく」の多用に

伴い，「きそく」は徐々に用いられなくなっていった。(2)中世以降，㊁〔筆者注：表にあらわれた心の内面の様子，有様。きそく。〕の用法で「けしき」と「きしょく」（「きそく」は「きしょく」よりさらに意味が限定される）が併用されるが，「けしき」は中古の仮名文学に多用されたため，和語のように意識され，外面から観察される心の様子について用いられる傾向があるのに対し，「きしょく」は漢語的な性質をもち，人の内面の状態そのものを表わすことが多いというおおよその違いがある。（4巻113～114頁）

ところで，「きそく」と「きしょく」の関係については，表記上の相違，発音上の相違，語の相違という三通りの見方があり得るが，佐藤喜代治（1996）では㈿のごとく発音の相違として説明されている。

㈿「気色」は後に漢音で「キショク」と読むようになりました。ロドリゲス（1561～1634）の『日本文典』に「御気色（ごきしょく）を伺ふ」という句が見えます。古代には直音で「キソク」と言いました。『色葉（いろは）字類抄』（橘忠兼が編集した平安末期の辞書）に「気色（キソク）」とあります。東松本『大鏡』に，

一条院の御悩み重らせ給ふ際（きわ）に，御前に参り給ひて，御きそく賜はり給ひければ，（道隆）

という例があります。一条院の御病気が重くおなりになった時，天皇の御前に参上して，御意向を承った，の意です。（87～88頁）

一方，田中（1969）は＜「きそく」は漢文系の「きしょく」が音転化したもの＞とし，平安末から中・近世の文献の用例を挙げつつ＜「きそく」の方が和文に用いられ始める時期がやや早い＞＜「きしょく」は「心の外面に表われた表情としての〈顔色・顔つき〉の意の用例も少くない」（13頁）＞という点で差を認め，両者を別語として扱う。その他，上掲の佐藤亨（1980）㈷に「和語的なキソク」という文言も見える。

⑷ 「けしき」の表記について

「けしき」の表記を「景色」とするのは，後に宛てられたものであり，そのきっかけは「けしき」が＜もっぱら風景の意味を担うようになったこと＞といわれている。

＜「景色（けしき）」は後世のもので，「気色（けしき）」が本来のもの＞とする指摘は，『言海』に，

けしき（名）「景色」［前條ノ語ノ転カ］目ニ見ユル山水ノ景（カゲ），又，色。景色（ケイショク）。景（ケイ）。風景（フウケイ）。景勝〔筆者注：前條の語とは「けしき（気色）」を指す〕

の如き記述が見えるほか，近年では，西端（1978）にも㈹の如く述べられている。

(メ)現在，自然に関する「けしき」に対して「景色」をあてているが，それは，後に付与された用字ではないだろうか。(93頁)

西端（1978）は，その根拠として，(1)我国の勅撰集中の和歌では「けしき」は＜自然に関する例＞と＜人間に関する例＞の二種類の用法があり，漢籍における「気色」も同様であること，それに対して，「景色」の方は，漢籍では自然に関する用法しかないこと，(2)「気色」は，呉音読みすれば「ケシキ」となるが，「景色」は，漢音，呉音いずれにしろ「ケシキ」とは読むことが出来ないということ，を挙げる。

「けしき」を「景色」と表記した古い確例の指摘はまだ見ないが，梶井（1990）は，『後鳥羽院御口伝』の「森の下に少し枯れたる草のある他は気色も理（ことわり）もなけれども」の「気色」が群書類従本で「景色」となっていることを挙げ(モ)の如く述べている。

(モ)(自然，もの，場所などの様子や雰囲気をあらわす「けしき」は）中世になると『景気』『景色』が当てられるようになる（21頁）

ただし，梶井（1990）によると，慶応大学図書館本（観応二年1351奥）では「気色」とあり，書陵部本他では「景気」とあるとのことなので，群書類従本の「景色」という表記が何時くらいまで遡れるのかが問題となる。佐藤亨（1980）〔上掲(3)の(マ)〕や，佐藤喜代治（1996）は『雑事類編』他の近世期の「景色」の使用例により，近世には自然のたたずまい・風景を表す「けしき」が「景色」と書かれたと指摘しており，深雪（1953）も同様に，この表記の発生を近世期と考えている。

深雪（1953）は，「景色」が「けしき」の表記に使用されるようになった時期やきっかけについて(ヤ)のように述べ，＜徳川時代，「けしき」が風景を表すようになったので，その影響で，風景の意味を持つ「景色」まで「けしき」と読むようになった＞と推察する。

(ヤ)今，私達が使つている景色という文字は，唐代に，北中国の汾というところに居た，宋之門が，風景をあらわすのに使つているのがみられます。しかし，日本で景色という文字が使われる様になつたのは，どうも，ひかく的近代のことらしく，徳川時代からではないかと思いますが…。宋之門の時代や，住んで居た場所などから察して，漢音読みでけいしよくと読むのがよいのではないかと思うのですが，大方けしきと読んでいることなどから察して，前の，気色の呉音読みであるけしきが，この景色のあらわしたところの風景をあらわすのにも使われるようになるまでになつてきていた，その影響のために景色がけしきと読まれる様になつて来たのではないかと私は思うのです。（5～6頁）

「景色」という宛字は，「けしき」が自然や風景を表すようになった影響だと見るのは，次の根来（1976）(ユ)や『日本国語大辞典』(ヘ)〔上掲(3)〕でも同様である。しかし，

その時期については(ユ)では触れず，(ヘ)では＜「けしき」がもっぱら自然界の様子を表すようになったのは鎌倉時代以降，「景色」と表記されるようになったのは近世＞としており，「けしき」が風景や自然をもっぱら表すようになったとする時期の認識に開きがある。

(ユ)さてわたくしはさきに「けしき」を漢語のように説いた。それは否応なしに「けしき」という語が漢語の「気色」から出た語であり，それを呉音で読むと「けしき」ということになるのであるが，それがやがて自然の風景に用いられるようになって，「気色」から出たけしきに「景色」をも当てるようになったと考えられるからである（142頁）。

一方，佐藤亨（1980）は，「けしき（景色）」が近世に自然の状態を表すようになった理由については触れてないが，この宛字の発生を含めた近世期の「けしき」の勢力増大について，「景気」の意味変化と関連づけて(ヨ)のように述べる。「景気」の意味変化とは(3)の(ホ)(マ)にもあるように＜本来「自然の様子」を表していた景気が，室町時代には「人間の有様」をも表すようなったが，近世の元禄頃には「威勢とか活況・活気」等の新しい意味が発生し，後にはこの新しい意味の方に限定して使用される＞という流れである。「ケシキに『景色』なる文字を宛てて専ら自然の様子を示す」ようになったことを，「景気」の意味をますます狭めた要因の一つと見るのである。

(ヨ)また気色は，ケシキ・キショクとなる。近世にはケシキに気色・景色の字があてられ，前者は主に人間の様を，後者は自然の状態を示す。しかし次第に景色が優勢となり今日に及ぶ。キショクは方言で気分・気持・気味といった意味に用いられている。

では「景気」の意味変化—意味の限定—は何故に生じたのであろうか。現在これに十分答え得ることはできないが，上述の事柄から次のようにいうことができると考える。即ち「景気」は「気色」と意味上重なる性質の語であった。しかしてケシキ（気色）が古くから種々の意味に用いられていたところへ，新たに「景気」が入りこみ，ために意味の上で重なりが生じた。勿論ケシキは和語めいた語として，一方「景気」は漢語めいたものとそれぞれ意識されてはいたであろう。だがケシキの勢力に及ぶべくもなく，結局「景気」はケシキとの間にさし示す意味を分つに至る。その際，ケシキが担わない分野を「景気」が主に担うのは当然のことで，特に元禄以後において顕著にみられるのである。それは「景気」が威勢・活況・気配・人気の外，経済上の活況をも示すに至った点にみることができる。

一方，ケシキはキショク・ケショクとなって人間の種々の有様をさしたり，

ケシキに「景色」なる文字を宛てて専ら自然の様子を示すようになると，一層「景気」の意味分野が狭ばめられていった。逆にいえば，人間や事物の威勢・活況等を指す点にこそ「景気」の存在理由があった。更に「景気」の意味の限定を促した要因として，風景・景等の漢語，特に風景の使用の一般化があげられると考える。(239～240頁)

以上，<「けしき」が自然界の様子を表すようになったことと連動して「景色」という文字が宛てられるようになった>という点については，大方の見解は一致する。しかしながら，中世以後の「けしき」の意味把握――もっぱら自然について用いるのか，人間の様子にも依然用いるのか――や，「けしき」が自然について使用される時期――平安・鎌倉なのか近世なのか――についての認識に相違があり，ひいては「景色」という宛字発生の必然性にも明確性を欠く結果を招いている。

「けしき」が自然を表すことに起因して，「景色」の宛字という結果が生まれたのであれば，『日本国語大辞典』(ヘ)のように原因を鎌倉時代以降，結果を近世とするのは，時間的に因と果が離れすぎているし，深雪(ヤ)のように原因も結果も近世に起こったとするなら，西端（1978）や根来（1976）らが主張する平安中期以降の自然を表す「けしき」と，「景色」という用字で表されたところの近世の「けしき」が意味的にどう違うのかを明らかにする必要があろう。

加えて，自然を表す様々な漢語・漢字の中から，なぜ特に「景色」という用字が選択されたのかを追求した論考もなく，『新編大言海』*17の「けしき」の項に(ラ)のごとく<「景色（けしき）」は「景色（けいしき）」の約>という説が提示されるにとどまる。

(ラ)けしき（名）「気色」［けはひ(イ)ニ，気色(キショク)ノ字ヲ充テテ，気色(ケシキ)ト読ム語］（一）ケハヒ。キザシ。ミエ。アリサマ。ヤウス。…（二）顔ノケハヒ。カホイロ。顔色。…(三)心ノケハヒ。気色(キショク)。機嫌。(好キニモ，悪シキニモ云フ)（四）ココロモチ。意中。…

けしき（名）「景色」［景色(ケイシキ)ノ約，栄耀(エイエウ)，ええう(ヨ)］目ニ映(ウ)ツル，山水ナドノ景(カゲ)，又，色。ナガメ。景色(ケイショク)。景(ケイ)。風景(フウケイ)。…（632頁）

おわりに

以上，従来の研究を整理した結果，中国語「気色」の受容の問題，文献に現れる使用傾向の偏り，現代語への意味変化，「きしょく」との関係，「景色」という宛字の問題については，まだ十分に検証されているとは言い難く，今後さらなる追求を要することが明確になったかと思う。今後は，

1）自然に関する「けしき」の用法と意味の検討
2）「けしき」の抽象名詞的性格の変遷
3）文献における「けしき」の用法の偏りと実際の言語との関係
4）「けしき」や「きしょく」の＜主観性＞は何時まで保持されたか
5）「けしき」に「景色」が宛てられた理由

等の問題を念頭に置き，中世以前の「けしき」の本質とそれ以後の変遷について検証していくべきかと思われる。

参考文献

阿部秋生・秋山虔・今井源衛（1970）『日本古典文学全集12　源氏物語一』小学館

池田亀鑑（1957）「紫式部日記考證（遺稿）」『国語と国文学』34巻2号

小野正弘　(2000)「中古における『気色ばむ』の用法―中立的な意味の時期の記述―」『鶴見大学紀要　第1部　国語国文学編』37号

梶井恵子（1990）「中古の『けしき』と『けはひ』―パラダイム的一考察―」『立教大学日本文学』64号

北住敏夫（1944）『日本文芸の理論』弘文堂書房

国広哲弥（1982）「ナガメ・ケシキ・フウケイ・コウケイ」『ことばの意味3　辞書に書いていないこと』平凡社選書73

佐藤喜代治（1996）『一語の辞典「気」』三省堂

佐藤亨（1980）「III　近世語の通時的研究　第十章『景気』とその周辺の語」『近世語彙の歴史的研究』桜楓社

高木市之助（1936）「景」『文学』4巻11号

田中新一（1969）「『気色』（けしき・きそく・きしょく）考」『解釈』15巻11号

中井正一（1947）「気（け，き）の日本語としての変遷」『帝国学士院記事』5巻1号

中島洋一（1964）「歌論に於ける『景気』理念の本質」『日本文芸研究（関西学院大学日本文学会）』16巻3号

西川治（1984）「地理学A・B・C　LANDSCAPE」『地理』29巻8号

西端幸雄（1978）「『けしき』と後拾遺集―特に，自然に関する「けしき」について―」『国語学』112集

根来司（1976）「IV　かさねて中世文語　第一 八代集と『けしき』」『中世文語の研究』笠間書院

――――（1977）『源氏物語枕草子の国語学的研究』有精堂出版

――――（1982）「中古和歌の語彙」『講座日本語の語彙3　古代の語彙』明治書院

蜂屋邦夫（1978）「第二部　儒道仏三教交渉における気の概念―魏晋から五代まで　第一章　魏晋南北朝の気の概念　第一節　儒家思想における気と仏教」『気の思想―中国における自然観と人間観の展開―』小野沢精一他編，東京大学出版会

三谷栄一（1965）『日本古典文学大系79　狭衣物語』岩波書店

深雪健一（1953）「けしきという言葉」『山（日本山岳会編）』203号

山田忠雄（1960）『日本古典文学大系23　今昔物語集二』岩波書店

――――（1963）『日本古典文学大系26　今昔物語集五』岩波書店

山野正彦（1998）『ドイツ景観論の生成　フンボルトを中心に』古今書院

吉沢義則（1973）「『けはひ』と『けしき』」『増補 源語釈泉』臨川書店，もとは『語源釈泉』誠和書院1950年所収

渡辺実（1982）「語彙と文体」『講座日本語の語彙１　語彙原論』明治書院

注

*1 「人間―環境系の媒体としての景観プロセスに関する学際的研究」は，九州産業大学の研究者を中心に実施されている景観に関する総合的な研究プロジェクトである。本研究は，文部科学省による平成15年度「私立大学学術研究高度化推進事業」の一つである「学術フロンティア推進事業」として採択され，平成15年度から５ヵ年の計画で実施されている。

*2 たとえば，『日本国語大辞典』（*15）の「景観」の語誌の項には「日本の植物生態学・植物生理学の先駆者であった三好学（1861～1939）がドイツ語のlandschaft，英語のlandscapeの訳語として考案した近代の日本語。…」（４巻1215頁）とあり，『世界大百科事典（CD-ROM版）』（日立デジタル平凡社，1998年）の武内和彦執筆の「景観」の項には「景観は，植物学者の三好学がドイツ語のラントシャフト Landschaft に与えた訳語であるが，…」とある。「景観」という訳語については，西川（1984），山野（1998）他に言及されるような種々の問題点が存するが今は措く。

*3 「景観」は，各学問領域おける術語としてのみならず，日常の「けしき」「ながめ」等を意味する用語としても使用され，現代語では，むしろ後者の使用の方が一般的である。たとえば，

観賞する価値のある眺め。また，比喩的に，社会のある部面を眺め渡したとき見てとれる状況をいう。（『日本国語大辞典』第２版，小学館，2001年４月）

見るだけの価値を持った，特色の有る景色。（『新明解国語辞典』第５版，金田一京助他編，三省堂，1997年11月）

風景外観。けしき。ながめ。また，その美しさ。（『広辞苑』第5版，新村出編，岩波書店，1998年11月）

（風情のある）けしき。ながめ。（『学研国語大辞典』第2版，金田一春彦・池田弥三郎編，学習研究社，1988年２月）

けしき。ながめ。特に，すぐれたけしき。（『大辞林』新装第２版，松村明編，三省堂，1999年10月）

等の諸々の国語辞典の「景観」の語釈等を参照のこと。

*4 たとえば，「ながめ・ながむ（眺）」「のぞむ（望）」「たたずまい（佇）」「ありさま（有様）」「かたち（形）」「けわい（気配）」「みめ（見目）」「みもの（見物）」「みざま（見様）」「見はやす」「みわたす（見渡）」「みさく（見放）」「くにみ（国見）」「とおみ（遠見）」「つきみ（月見）」「はなみ（花見）」「ものみ（物見）」「ゆきみ（雪見）」「さくらがり（桜狩）」「はるがすみ（春霞）」「あきぎり（秋霧）」「しま（島）」「うたまくら（歌枕）」「観月」「観望」「観覧」「景」「美景」「佳景」「秋景」「景気（けいき）」「気色（けしき・きしょく）」「気味」「見物」「見所」「勝地」「壮観」「眺望」「遠望」「望見」「八景」「風情」「風土」「夜色」「遊覧」などは，中世以前の日本語文献に使用例のある用語である。

*5 『増補俚言集覧』，上，大空社復刻版，1990年６月，830頁参照。

*6 『本居宣長全集』第13巻，大久保正編，1971年９月，筑摩書房，702頁参照。

*7 参考までに『新編国歌大観』（角川書店，1992年４月，底本は江戸極初期書写の天理図書館春海文庫蔵本）の該当部（121頁）を挙げる。

一二六　雲までもあはれにたへぬ気色かな秋のゆふべのむら雨の空

是も次に申上候，気色といふ詞，強不可好詠之由，亡父申候き

*8 中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに総合索引　黒川本・影印篇』，風間書房，1964年６月，407頁。

*9 大槻文彦編。引用本文は，六合館刊の改版縮刷（1926年）による。

*10 諸橋轍次著，修訂第2版，大修館書店，1994年5月，第6巻850頁。

*11 諸橋轍次著，縮写版，大修館書店，1967年3月，第6巻850頁。

*12 漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂処編，漢語大詞典出版社，1990年12月，6巻1026頁。

*13「気色」の漢籍における例は，蜂屋（1978）により，晋代の体内的な「気」の例として，

「人に四肢五臓あり，精気往来し，彰われて気色となる」（256頁）〔『全晋文』中の干宝『山亡論』，梶井（1990）はこれを「視覚的に外面から感知できる〈顔色〉〈人の様子〉の意味」（13頁）と説明している〕

の例，佐藤喜代治（1996）により，

「雨添山気色（山も雨にぬれて一段とみごとに見える意）」

「気色圧亭台（[巨石奇巌の] 壮大な姿が [庭園にある] 亭台を威圧している意）」〔以上，『白氏文集』〕，

「夕嵐増気色，余照発光輝（夕方，風が吹き雲が出て一層（いっそう）趣が深く，夕日が周囲を照らし出している意）」〔孟浩然（689-740）の唐代の詩〕

の例等（86頁）も挙げられている。

*14 阿部・秋山・今井（1970）は，「けはひ」の頭注において「『けはひ』は態度，様子。『けしき』が静止的固定的であるに対し，『けはひ』は動的雰囲気的な感じ。」（103頁）と指摘するが，この捉え方は＜「けしき」は視覚的，「けはひ」は聴覚的＞とする考え方を承け，さらに＜「けしき」はこの時この場での内面の反映を押さえる，「けはひ」は繰り返し認められるものをも押さえる＞といった指摘へと繋がるものといえようか。

*15 小学館，2000年12月～2002年1月，第2版。以下，『日本国語大辞典』を引用する場合はすべて第2版による。

*16 梶井（1990）も「中古になると，初期の漢詩文には『気色』の用例があるが，この時代の主流である日記，物語文学では「けしき」が専ら用いられるようになり……気色（きそく）の例はごく少ないが，……」（13頁）と述べている。

*17 大槻文彦，冨山房，1982年2月。